

東京大学大学院人文社会系研究科  
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣  
帰国報告

2012年4月5日

野口 優

所属：文学部言語文化学科現代文芸論専修3年

派遣形態：個人派遣

研究課題名

ブエノスアイレスとパリ：  
アルゼンチン都市文学におけるシュルレアリスムの受容

派遣先での活動

(1) 派遣先の基本情報

国名：アルゼンチン共和国

都市名：ブエノスアイレス、ティグレ

研究機関名：ブエノスアイレス国立大学・アルゼンチン共和国国立図書館

コンタクトした研究者：José Amícola ラ・プラタ大学教授

(2) 派遣期間

出発日：2012年1月25日

帰国日：2012年3月7日

総日数：42日

(3月12日—3月21日：私費にてフランス、パリに渡航)

主な研究成果

(1) 当初の計画の概要

アルゼンチンの作家フリオ・コルタサル（ジョージ・コルタサル）の文学作品におけるシュルレアリスムの影響の考察を目的として、ブエノスアイレス市内の美術館を訪れアルゼンチンにおけるシュルレアリスム受容の歴史を調査し、ブエノスアイレス大学の中央図書館を利用してコルタサルに関する資料収集を行うことを予定した。またブエノスアイレス大学で外国人向けに行われている夏期の語学集中プログラムを受講してスペイン語の語学力向上を目指し、さらにブエノスアイレス、パ

リ両都市の地勢学的特徴の比較を行うことを目標とした。

## (2) 実際に達成された成果

ブエノスアイレス、パリの両都市において、作家がかつて暮らした地域や小説の舞台となった地区、通り、レストラン、運河などを訪れ、都市の実態と作中の風景とを対照しながら歩き、コルタサル作品を理解する上で鍵となるふたつの都市の様相と生活を知ることによって、両都市の比較という側面から作品にアプローチする視点を実感をともなって得られたのが、今回の派遣を通じて達成された大きな成果である。さらにブエノスアイレス市内の美術館を訪問し、**Xul Solar**をはじめとしたシュルレアリスムとの関わりを感じさせるアルゼンチンの画家たちの作品に触れたことで、コルタサル作品におけるシュルレアリスムの影響をより多面的に考えるきっかけが与えられ、今後の研究に意味をもつものと考えている。加えて **José Amícola** 教授に直接お会いして研究に関するコメントをいただき、今後も指導をいただけることになった。最後に、当初予定していた通りブエノスアイレス大学の語学集中プログラムを通してスペイン語の語学力の向上を図り、図書館を利用した資料収集も十分とは言えないものの、ある程度まで達成することができた。

## (3) 今後の研究展望

収集した資料の読解を進め、今回の派遣を通して得られた経験を反映させながら、シュルレアリスム、ブエノスアイレスとパリをキーワードとしたコルタサルの作品分析を試み、卒業論文を執筆することが当面の目標となる。さらにボルヘスやサバトといったアルゼンチンの他の作家も視野にいれつつ、都市と文学、絵画をはじめとする芸術の関係といったテーマや、その中でのラテンアメリカという要素の役割といった問題について展開してゆければと考えている。

\*

\*

今回の派遣を支えてくださった皆様に心から感謝申し上げます。